

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書  
(3年計画の2年度目)

1. 研究課題

(和文) 日本の文学理論・芸術理論

(英文) Theories of Literature and Arts in Japan

2. 研究代表者

(氏名) 大浦康介

3. 研究期間

平成 23 年 4 月 から 平成 26 年 3 月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

日本ではこれまで(主に大学で)どのような文学・芸術理論が教えられてきたか、また日本に「土着の」文学・芸術理論があるとしたらそれはどのようなものか——これら二つの問いを中心的課題として研究を進める。前者は明治以降における英・独・仏の文芸理論の移入という問題と重なるだろうし、後者は近代以前も含めた、日本の歌論、物語論、芸能論、批評理論等の掘り起こしとその西洋理論との突き合わせという問題だと言い換えられるだろう。これらの問いを西洋理論の専門家が提起し、日本の文学や芸術の専門家を交えた場で討論したい。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

**2年目にあたる平成24年は、前年に引き続き、日本の主要な文学・芸術理論関係の文献を班員全員で読み、それについて討論するという会読形式で研究会を開催した。また、野網摩利子氏と齋藤希史氏をゲストとして招き、文学理論関係の報告をしていただいた。内容は以下のとおり。**

4月16日：報告 森本淳生「小林秀雄の初期批評とポール・ヴァレリー」

5月7日：会読 柳田国男「口承文芸とは何か」を読む(菊地暁担当)

5月21日：会読 藤井貞和『物語理論講義』を読む(久保昭博担当)

6月4日：会読 伊藤整『小説の方法』を読む(飯島洋担当)

6月18日：会読 吉本隆明『言語にとって美とはなにか』を読む(I、第I章、第II章)  
(齊藤涉担当)

7月9日：会読 吉本隆明『言語にとって美とはなにか』を読む(I、第III章、II、第六章)  
(中村ともえ担当)

10月8日：報告 野網摩利子：「漱石による文学理論の補完を目指して—『夏目漱石の時間の創出』の先へ」

10月15日：会読 岡本太郎の芸術論(藤田茂担当)

11月5日：会読 河出書房『新文学論全集』(第5巻『文芸思潮』、第6巻『国民文学と世界文学』)を読む(大浦康介担当)

11月19日：報告 齋藤希史：「明治日本の批評言語」

12月3日：会読 千野帽子『読まず嫌い。』、『俳句いきなり入門』(岩松正洋担当)

- 12月17日：資料紹介と報告 (1)開信介(研究社「文学論パンフレット」)、(2)中村ともえ(自然主義の描写論のアンソロジー)
- 1月21日：会読 亀井秀雄『感性の变革』を読む(笹尾佳代担当)
- 2月4日：会読 河出書房『新文学論全集』第一巻「文学概論」ならびに第二巻「表現論」(久保昭博担当)
- 2月18日：会読 河出書房『新文学論全集』第三巻「批評・鑑賞」ならびに第四巻「文学のジャンル」(河田学担当)
- 3月11日：会読 折口信夫「日本文学の発生 序説」(西川貴子担当)

#### 6. 研究成果の概要(400字程度)

2年目である本年度の成果の第一は、前年度に引き続き、文学理論・芸術理論関係の重要文献(柳田国男、藤井貞和、伊藤整、吉本隆明、岡本太郎、亀井秀雄等)の会読をつうじた班員による基本情報の共有である。本年度は、これに加えて、戦中期に編まれた『新文学論全集』全5巻を「発掘」し、これを読破することができた。また、ゲストの齋藤希史氏によって「漢文脈」を踏まえた漱石『文学論』の再読と明治日本の批評言語の再定義がなされたが、これもわれわれに大きな示唆を与えるものだった。

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績(出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など)

- 齋藤希史氏講演会「「明治日本の批評言語」」(半公開、平成24年11月19日)
- 研究会ホームページ(<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~theory.jp/>)をつうじた文学理論関連文献リストの公表

#### 8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数			延べ人数		
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内(法人内)	2	10	1	2	90	10	21
国立大学	7	9	1	1	110	16	16
公立大学							
私立大学	10	11			105		
大学共同利用機関法人							
独立行政法人等公的研究機関							
民間機関							
外国機関							
その他							
計	19	30	2	3	305	26	37

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例)・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合)：参加人数2人、延べ人数6人

#### 9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	5	
うち国際学術誌に掲載された論文数	( )	( )

※下段の ( ) 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に掲載された論文数	( )	( )

※下段の ( ) 内には、拠点外の研究者による成果 (内数) を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等に記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由			
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名